

# 古墳時代の土師器が出土

## 七十苜遺跡埋蔵文化財調査



▲七十苜遺跡出土 紵痕土器

七十苜遺跡は、伊南川右岸の河岸段丘上に所在します。試掘調査前は、明和保育所、御蔵入三十三観音三番礼所新福寺の付近が遺跡地とされ、昭和40年代に木本元治氏（現：国見町教育委員会）によって紵痕土器が発見されています。この土器が発見されたことにより、只見町にも弥生時代前期に稲作が伝わっていた可能性が示される遺跡となっています。現在この遺物は会津若松市の県立博物館に展示されています。

### 七十苜遺跡とは……

町教育委員会では、河川改修工事計画のある小林地区で平成20年度から平成21年度にかけて遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施しました。この調査で遺構と遺物が確認されたことにより、平成23年度まで継続して全4、151mの発掘調査が行われることになりました。今回は、平成22年度の発掘調査の成果を報告します。

### 平成22年度の調査概要

平成20年度から21年度の試掘調査では、伊南川寄りの南側試掘調査を実施したところ、遺構及び遺物が確認され、発掘調査が必要な範囲が約4151mと確認、平成22年度は2151mの調査を実施しました。

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱列5列、土坑24基、性格不明遺構4基、河川跡3条、ピット（柱跡）147基を確認しています。当初は、縄文時代から弥生時代の遺跡を想定していましたが、中世以降の遺構も確認されました。出土した遺物は、土器片314点（縄文土器、弥生土器、土師器等）、石器類266点（打製石斧、独鈷石、剥片等）、陶磁器、炭化物等149点が出土しました。



①4号土坑出土 縄文後期



②2号河川跡出土 縄文後期



③2号河川跡出土 縄文晩期



④2号河川跡出土 弥生前期



⑤2号河川跡出土 弥生前期



⑥2号河川跡出土 打製石斧



⑦2号河川跡出土 独鈷石

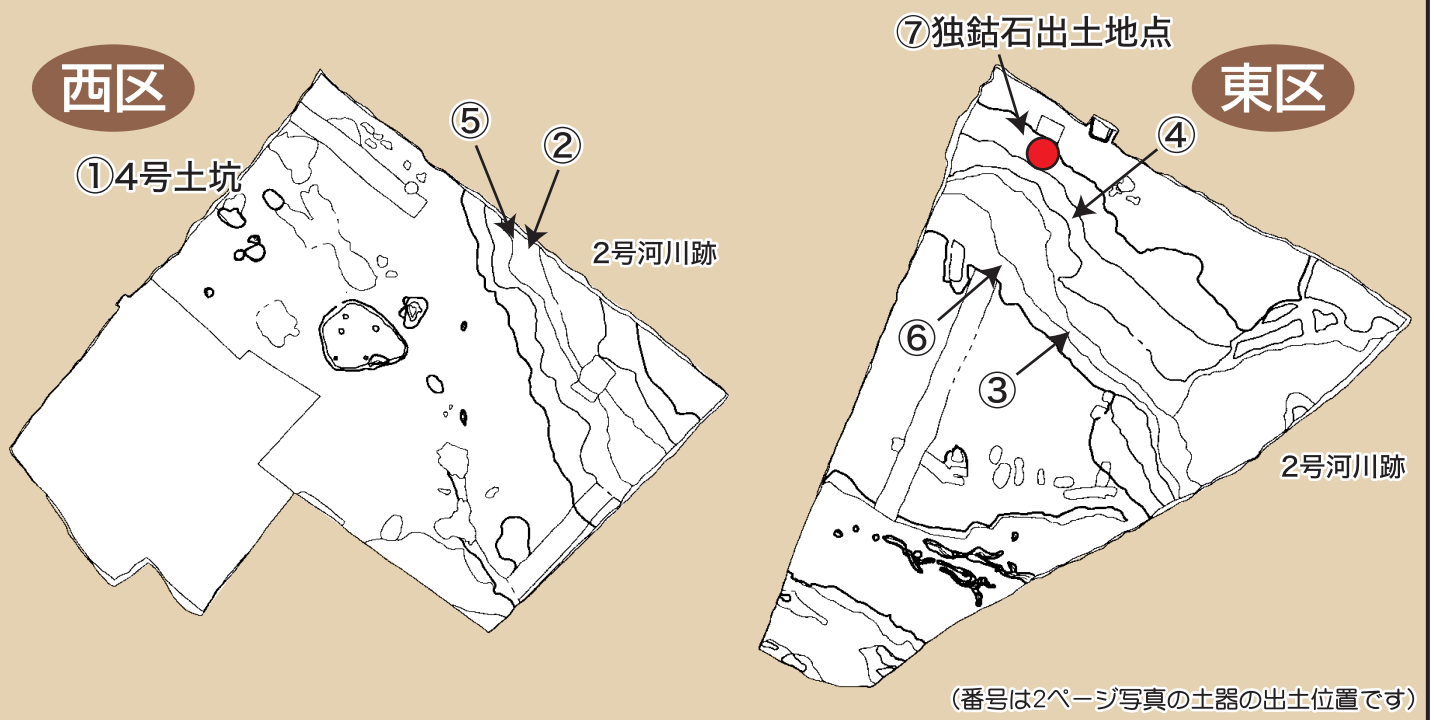


⑧3号河川跡出土 弥生土器

# 七十苜遺跡調査区全景



## 縄文～弥生時代の図面



今回の調査で七十苜遺跡の中心が、縄文時代中期頃（5千年～4千年前）から弥生時代中期頃（約2千2百年～2千年前）と考えられています。4号土坑から出土した土器については、羽状の縄目を施した鉢で縄文時代後期の遺物であると考えられます（①）。また、2号河川跡からの出土遺物がほとんどで、縄文時代後期から弥生時代中期の年代幅で遺物が確認されています。土器では、加曾利B式と呼ばれる土器（縄文後期末：千葉県加曾利貝塚）、大洞A式（縄文晩期：岩手県大洞貝塚）や南御山Ⅱ式（弥生中期：会津若松市南御山遺跡）などと同型式の遺物が出土しています。また、石器類については、多数の打製石斧、独鈷石が出土しています（②～⑦）。独鈷石とは、仏具の独鈷杵に似ていることから現代に付けられた名称で、使用用途不明の遺物です。

3号河川跡は、旧伊南川の河川跡と推定され、弥生土器とともに陶磁器が出土しているため、近世に埋め戻し、畑地を拡張したと考えられます。3号河川から出土した遺物の中に福島県でも類例がない弥生土器の蓋が出土しています（⑧）（5ページの図面に出土位置記載）

### 縄文時代から 弥生時代の遺構・遺物

古墳時代の土師器(はじき)の発見

只見町には、古墳が全くありません。古墳とは、墳丘を利用した、権力者、有力者の墓のことです。1千6百年前から1千3百年前頃に古墳の造営がされていました。また、只見町には古墳時代の遺跡が全くないため、遺物も確認されていませんでした。今回の調査で、古墳時代の土師器の甕(かめ)2点と坏(つき)3点が発見されました。こ

の土師器の年代は5世紀頃と考えられます。残念なことに遺構に伴ったものではありませんでした。しかし、只見町に古墳時代に人が住んでいた可能性を示す遺物であることは間違いないと考えています。もしも、古墳時代の遺構やそれに伴う遺物が確認されれば大変貴重なものとなります。

中世以降の遺構

掘立柱建物跡1棟と柱列5列を発見しています。

1号掘立柱建物跡は、南北2間×東西5間の建物跡で北側に庇が付属する建物跡と考えられます。建物跡の柱間は、2・4mから2・6m、建物から庇までの柱間は、1・4mから1・6mでした。また、柱の穴の堆積土と柱の検出面から多量の炭化物を確認したことから、火災により消失したものと考えられます。出土遺物がないため詳細な時代は不明ですが、建物跡の南側に3号河川跡があり、これが伊南川の旧河川跡と推測され、あまりに河川に近いところにある建物なので中・近世の河川に關係する施設の可能性が高いと考えています。

建物跡の南側に3列(2号柱列、3号柱列、5号柱列)あります。写真と図面(5ページに掲載)ではまだ掘削していませんが、西側に約50基の柱が連続してあるのを確認しました。これについては、建物跡との方向が若干違うため建物跡とは時代が違います。鉄釘等が出土しており、明治以降の柱列と考えられます。また、柱の間隔が極めて狭いことから農作物に關係する柱列と考えられています。



土師器 甕



土師器 甕



土師器 坏

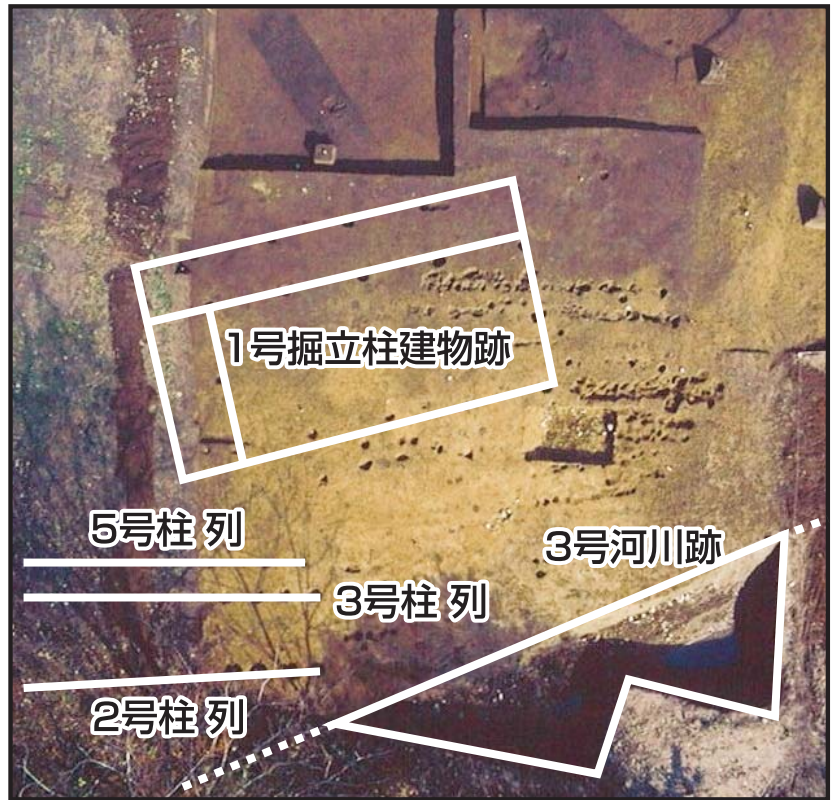


土師器 坏

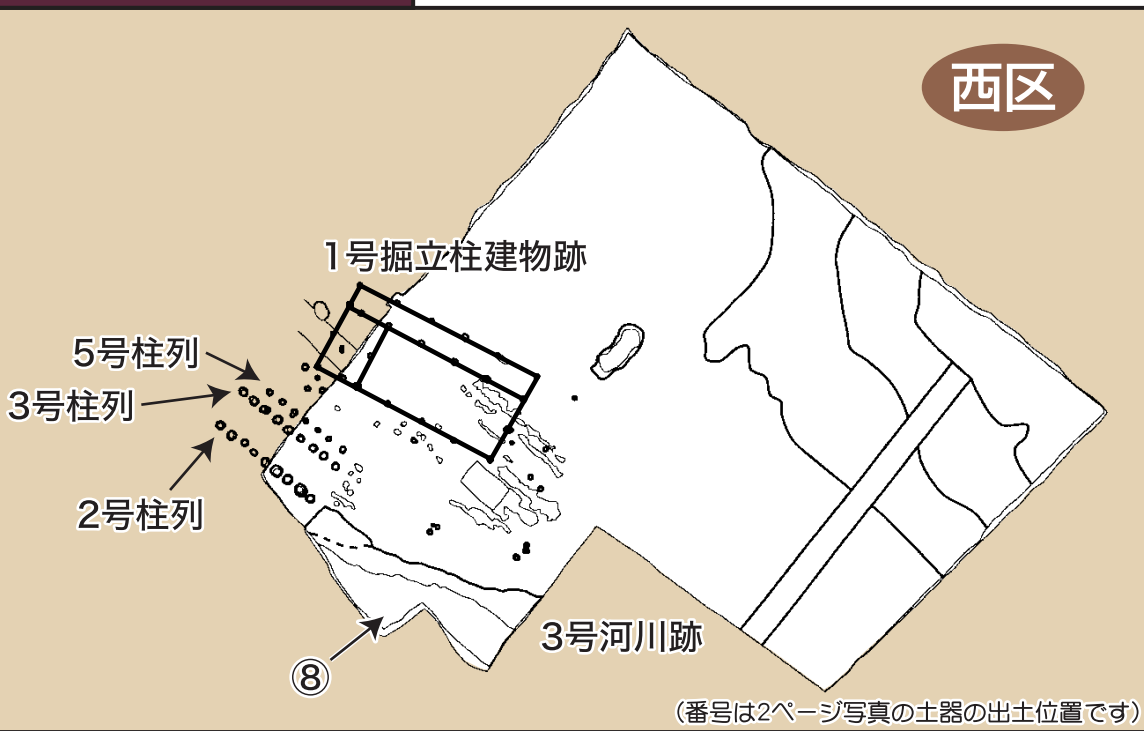


土師器 坏

# 七十苧遺跡 建物跡全景



## 中世以降の図面



### まとめ

七十苧遺跡では、前述したような発見がありました。現在までの調査では、住居などは発見されていないため、集落跡では

ないと考えています。しかし、近くに集落跡がある可能性はあります。七十苧遺跡の土器片、石器類は、窪田遺跡で発見された、遺構、遺物と重なる年代であり、打製石斧の形状・石質も同じであるため、窪田遺跡と七十苧遺跡ではなんらかの関係があった可能性が高いと考えています。2号河川跡から多数の打製石斧が出土することは、近くに石器の工房跡があることを匂わせます。また、七十苧遺跡では粘土土器が発見されているため、土壌の分析などにより、弥生時代に稲作が本当に行われていたかどうかの調査も実施しなければならぬと思います。

### 平成23年度の調査

平成23年度の調査は、平成22年度に調査した部分のさらに西側についての調査を実施する予定で面積が約2000㎡になります。平成20年度から21年度の試掘調査の際に、竪穴住居の跡を1棟確認しているため、只見町の歴史を知る上で貴重発見があるかもしれません。現場の見学は随時行えますので、ぜひ見学に来てください。

(調査報告者：渡部賢史学芸員)